

胃癌外科の歴史

高橋 孝 著

荒井邦佳 執筆協力

＜書評者＞ 高橋俊雄（東京都病院経営本部顧問・医師アカデミー運営委員長/都立駒込病院名誉院長/京都府立医科大学名誉教授）

本書は、Billroth が 1881 年世界最初の胃癌切除に成功し、人体の消化管の連続性を離断し再建の可能性を初めて示した消化器外科最大の歴史的出来事から始まり、現在の胃癌の外科治療に至るまで、著者の歴史観「まなざし」で胃癌外科の歴史をたどった、他に類をみない興味ある書であります。

著者の胃癌外科に対する「まなざし」は主に胃癌のリンパ流、リンパ節郭清に注がれ、欧米での Mikulicz, Pólya, Navratil, Rouvière らの業績、さらにわが国の三宅 速、久留 勝、梶谷 鏗らによって確立された系統的胃癌リンパ節郭清について、膨大な文献を基に哲学的とも言える詳細な考察を行っています。しかも、本書は決して固い学術書ではなく、物語調

で書かれた大変読みやすい歴史物語であり、胃癌外科の歴史を知らず知らずに教えてくれます。

本書の著者・故高橋 孝先生は、医学書院の「臨床外科」に 2006～2007 年に連載された「胃癌外科におけるリンパ節郭清の始まりとその展開」を基に、これに大幅に手を入れて単行本化を図るべく準備中でありましたが、残念ながら 2009 年 5 月ご逝去されてしまいました。先生から生前依頼を受けた荒井邦佳先生（現 豊島病院副院長）は、持ち前の几帳面さと緻密さで本文の記述の統一、文献の補完、調査、校正を行い、この度本書が刊行される運びとなりました。

著者の高橋先生は、癌研の梶谷 鏗先生の高弟として外科手術の達

人であり、評者の前任地・都立駒込病院の外科部長としても立派な実績を残されております。生前、著者の高橋先生と直接的な交流はありませんでしたが、先生は強い学問的探究心の持ち主であり、理論家であり、そして本書にもあるように、その理論を実際の外科臨床の第一線の現場で実践された臨床外科医であります。

いま、胃癌の治療法は以前とは大きく様変わりしてはおりますが、ここまでたどり着くためには先達の並々ならぬ努力があったことを、私どもは知らねばなりません。本書は、これらの胃癌外科の歴史をわかりやすく教えてくれる良書として、かつてリンパ節郭清に明け暮れた外科医だけでなく、今後の外科臨床を担う若い外科医の方々にもぜひ読んでいただきたい、推薦したいと思います。

●B5 頁 272 2011 年

定価 9,450 円

（本体 9,000 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-00902-7]

医学書院 刊